

---

# TimeTraveler

sitazu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

TimeTraveler

### 【Zコード】

N4069Q

### 【作者名】

sitazu

### 【あらすじ】

突然の変異で生まれた、人間亞種。

彼らは人間にはない能力を持ち、時を渡ることがが出来た。

そんな人間たちが集まる組織、『タイムトラベラー』

現在人数は、一千万を超える。

そんな組織にいる八人が織り成す、任務中の色々な馬鹿げたこと！  
時には真剣に、敵と戦っています。

作「あらすじってこんなのか？」

「 知らね。 大体、 あらすじ ハロハロ 变えるのやめりよ。 混乱する  
だろ。 」

作「……あ、どうぞお読みください。これこれ、僕らの『恋せば恋』  
しないでいいですよ。」

## プロローグ（前書き）

どうも、sitanuといひものです。若輩者ですが、宜しくお願  
いします。

## プロローグ

ある少年がいた。

彼は、組織に入っていた。

彼は疲れていた。

彼はある人にあることを告げると、

あとは、誰にも何も言わずに居なくなつた。

そのある人は、皆が慌てふためいても、

何も言わなかつた。

約束したからだ。

そのうち、混乱が收まり、組織が機能し始めた。

それから一年後。

二年の中に、その組織にも、多くの人が入つた。

・・・少しの死者も出た。

そして、彼は刻み込まれた遺伝子に従い、再び動き出す。

約束の為にも、仲間の為にも、

自分の心に従い、動き出す。

## プロローグ（後書き）

あ、この小説は、そこまでシリアルは入らない予定です。  
面白くしていきたいと思います。

主人公より先に登場するヒロインって……（前書き）

幽「おい」

作「ん？」

幽「なんで俺より先にあいつが？」

作「展開的にな、これ以外思いつかん」

幽「この文才のめ！」

文才〇「俺の手のひらで踊つている奴がなにを！」

幽「それはどうかな！」

文才〇「何！」

幽「頭の上を見ろ！」

文才〇「なん……だと……」

幽「作者が再起不能になりましたので、本編をビリヤード

## 主人公より先に登場するヒロインって・・・

? ? ? side

私は今職員室の前にいる。

別に宿題を忘れたんじゃない。

入学シーズンから少しだけ外れた今、転校してきたのだ。理由はこの学校の警備だ。

（最近物騒だもんねえ。）

物思いに耽りながら、先生を待つ。

「ガンバローね、レイ。」

「うん！」

話しかけてきたのは、私とコンビを組むリエだ。

「学園生活は忙しそーだよね」

「うん、タイムトラベラーの仕事をしながらだもんね。」

タイムトラベラー、それは人間の突然変異による人間亞種の事を指す。

そして、そのタイムトラベラーが集まる組織の名前もタイムトラベラーといふ。

・・・何で？

また、変異の理由は分かつていない、一説によると、人間の環境適応らしい。

一理あるとは思う。

世界を脅かしている存在である「オプキュリアス」。

そいつ等に対抗するには、特殊な力を持つ私たちタイムトラベラーが頑張るしかない。

彼らは別の世界にいる、らしい。

私たちと同じ力を持つのだけれど、人の形をしていないランクの低い奴等を送り込んでくる。

とにかくその数が半端じゃない！

やばつ、こらついてきた。

まあ、そんなわけでこの学校、清明学園にきたつひとつ。  
オプキュリアスから「こ」を守るために、

主人公より先に登場するヒロインって……（後書き）

作「おおーもどりってるー。」

幽「微妙などこで終わってるが？何でだ？」

作「p s pの限界は越えられん」

幽「p cでしろよ・・・」

作「えー p s pの限界がわかつたので、短くいくか、p cでいくかにします。」

幽「誰も見てねえよ」

作「・・・」

幽「・・・じ、次回をよろしくー。」

## 主人公登場・・・？（前書き）

幽「ようやく俺の出番か。」

作「いや、主人公がお前とは一言も言ってないぞ。」

幽「はあ！？じやあああらすじは何だ！」

作「あれは俺がお前と一人で前書きと後書きを進めていく・・・そういう意味かもしかれんぞ？」

幽「嘘・・・だよな？」

作「さあ、本編入りまーす！」

幽「人の話をきけーーー！」

作「ちよつ、な、何してんの？駄目だつて！そんなに魔力練つたら！」

幽「消え去れえーー！」

幽「作者不在で行きまーす」

## 主人公登場・・・?

レイ side

思いを巡らす内に先生が来た。

「じゃあ、深間 理恵と松本 光付いてこい」

男の先生。優しそうです。

「どんなクラスだろうね？」

深間 理恵ことリエが聞いてくる。

「うーん。一人ぐらい私たちのことを何も知らない子が居たら良いんだけど。」

「望み薄だねえー」

二年の教室がある廊下を渡る・・・んだけど、何で一階に二年の教室なんだろ？

先生の指示で先生の陰に隠れて廊下を進む。無駄な騒ぎを防ぐため、だろ？。

（有名人も大変だよ）

心の中でそっぽやいた。

? ? ? side

進む、進む。

俺は前を見ると、立ち止まつた。

オブキュリアスの獣がいた。

（下位・・・だけど、その中の上位だな）

ソイツが雄叫びをあげる

「すぐに楽にしてやるよ」

俺はそつまつや否や、持つている大剣で十字を切り、衝撃波を飛ばした。

ソイツの体に深い切り傷を食い込ませ、声も上げさせずに倒した。また、進む。

不意に頭から鈍い音がした。  
頭に手をやると血がでていた。

上を見たとき俺が最後にみたのはアイツの大きな手だった・・・

「おい！起きろ龍牙！！すつげえぞ！」  
俺は夢から覚めた。

## 主人公登場・・・? (後書き) (あ書き)

幽「は?」

作「おお! 生きてる!」

幽「ちよい待て、夢オチ! ? しかも龍牙つて、マジで俺じやねえの!

!?

作「夢オチ、サイコー!」

幽「死ねえ!」

作「げふうつ!」

幽「殺す前に、」

作「何だ・・・?」

幽「龍牙つて誰だ?」

作「読者の皆さまの混乱を防ぐために言つが、あれはな・・・」

幽「あれは・・・?」

作「次回に続く!」

幽「アルマー! !

作「ちよつ、」

作者の姿が見つかることはなかつた・・・

俺つて馬鹿だなあ・・・（前書き）

幽「なんだ?」のサブタイ

作「・・・test」

幽「あー、そーいやあ活動報告に書いてたなあ。つてお前馬鹿だろ

！」

作「書いてんだろーが！」

幽「そんな自虐ばっかすつからイジられんだろーが」

作「そう・・・なのか？」

幽「なんだその田からウロコみたいな顔はウザいから止める

作「そう・・・なのか。」

幽「・・・駄目だ、こりや。そいじやー、本編行つまみーすー。」

俺つて馬鹿だなあ・・・

龍牙 side

俺が目を覚ますと、前の方に見知らぬ女子が一人いた。

とりあえず、安眠を妨害しやがった友達、菅谷を殴つてから聞く。

「なんか有名人っぽいが、誰だ？あの二人」

「は！？あの二人のこと知らねえの！？現役高校生アイドルユニット『光の恵』って言つたら、日本の中でも知らん人はいないぞ！」

「ここにいるだろ」

後は適当にあしらいながら思つたのは、

（あの名前で、よくここまで売れたな・・・）

ということだった。

リエ side

皆からまじまじと見られてますねえ。

そう思いながら立つていると、先生が何とか静めて

「一応自己紹介しといて」

というので、することにした。

・・・一人だけ我関せず、の子がいるなあ。後で話しかけて見よつ

と。

「深間 理恵です。タイムトラベラー、つまり時の旅人の仕事をしながら、アイドルをしています。皆と仲良くなれたら、と思います。よろしくお願ひします！」

「松本 光です！えーっと、リエとほぼ同じなので・・・割愛します！よろしく！」

その後、先生が十一回叫ぶまで、歓声はやまなかつた

・・・有名つてのはこういうときホンつといらないなあ。

そう思いながら先生の話を聞いていた。

俺つて馬鹿だなあ・・・（後書き）

幽「なあ、あの『割愛』つてまさか・・・」

作「人には越えられない壁があるのだよ、・・・そつ『マサマの字  
数制限』という名のな・・・」

幽「かつこつけでも、お前じやあ台無しだ

作「うるせー！わかつてんよ！」

幽「・・・つーか、まじで俺でねえの？文オゼロ」

文オゼロ「またかよつー！」

幽「で？」

文オゼロ「・・・企業ひ「死にたじりセー」お、おちつく  
・・・次の二コースです。」

某県で、意識不明の重体の男性が「ミミ捨て場に頭から入っている  
が発見されました。  
繰り返します・・・

## 龍牙の驚き（前書き）

作「前書きが長く、自分でもつまらないかなあ、と思つたので今回は自重します」

幽「後、寛大いや聖人の方は」こつこつ、感想という食事を与えてやつてくれ。」

作「それではどういわい。」

龍牙 side

俺はまじまじとその一人を見つめていた  
光の方は髪が長く、ツインテールにしているものの、それでも肩のあたりに届いている。

身長は俺と同じくらいで、160後半といったところか。  
対して理恵の方だが、こちらも身長は同じくらいだが、少し光よりも低い。

髪の毛は短めで、体育会系という言葉がぱちり当たる  
そして何より・・・かなりの美少女だ。

女子が苦手で、女子の容姿等には疎い俺でも相当可愛いくと思つ・・・  
つて、違え！論点ずれすぎだ！

容姿云々じゃなくて、あいつ等タイムトラベラーなの！？  
やつばいなあ、そいや約束の期限相当ぶつちぎつてんな。  
まあ、あのころの俺には見えんだろーが・・・

髪はぱさぱさにして長さも伸びてゐるし、眼鏡かけてるし、以前も偽名だし・・・

うん、ばれねーな。うん

「えっとお、みんなに聞きたいんだけどーーー」

理恵の方が質問する。

どーやら、少し語尾が伸びるのは癖のようだ  
「なーにー？」

男子のほとんどがハモる  
お前等、幼稚園児かつて。

「この写真の人見たことない？幽人っていうんだけど、この学校にいるかもしれないんだよねえ  
え？もしかしてバレてらっしゃる？  
モロで俺の本名なんだけど

## 龍牙の驚き（後書き）

作「まさかの龍牙＝幽人」

幽「俺としては嬉しいけどさ……」

作「ん？」

幽「それ、ほとんどの読者にとって、意外性の欠片もないから作「え？ いや、だつて」

幽「お前の文才ごときじやあ隠しきれん、駄作者」

駄作者「また変わってるし！」

幽「次回、俺の正体はバレるのか！」

駄作者「期待せずに待っていてくださいってゆーか、元に戻せ！」

幽「うるせえ！」

## 風の前の風（前書き）

作「ああー！PC投稿です。」

幽「無駄に長い…。」

作「…まあ、平均がどれくらいか知らないけどさ。」

幽「途中で飽きるかもしれないが、読んでいいってくれ。」

作「つていうか、ここまで読んでいる人いるのかな？」

幽「居ない！断言してやる！居ない！…」

作「ひつでえよ…」

幽「それではどうぞ」

## 嵐の前の嵐

龍牙 side

やばいなあ。いくら髪の色まで変えていのとはいえ・・・。

「うーん、こんな生徒見たことあるか?」

「いや、無いなあ。」

「龍牙! お前も見てくれよ!」

菅谷テメエ!

お前がお前の死亡フラグ立てんならいいけど、俺の死亡フラグを立てんな!

かといって断つたら、何が起こるか分かんねえ。

タイムトラベラーの気配を消してつ・・・と

「はいはい」

そつ言つて俺は教卓の近くまで近づいた。

とはいえ、タイムトラベラーは総じて観察力が高いんだよなあ・・・。  
たぶんバレるな・・・。

「ねえ、どう?えーと、龍牙君?」

ちよつ! 顔近つ! 光さん顔近いつて!

「い、いや知りませんね」

そそくさと離れる。

やつぱバレたか・・・?

「うーん、そつか。」

…前言撤回、こいつら低いわ。

「ココが最後だつたんだけどねえ、レイ」

「うん…。やつぱり学校じやなかつたんだね・・・。」

チョイ待ち、こいつら全部の学校をしらみつぶしに探し合つての  
か!?

何してんだ、あの野郎! 権力の乱用で部下を困らせんな!

レイ Side

あー、もう!

幽人か見つからぬいいいいいいい

絶対対戦しないとおかしいのよ。

ていうか、会つたこともない人を顔写真だけで見つけんのは無理が

ある。」

短めの黒髪に、私と同じくふくじの鼻長で、ハツと馬ばかうるさぐで、そして、最強の旅人

二二二一  
新編著者別書目

「ほらほら、全員座れ！」

先生の一言でまた全員がそろそろと戻っていく。

「今田は人気アイドル歌手が来ている、という事で、

卷之三

- ! - !

ଯାହାକୁ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

龍牙 Side

卷之二十一

なんだーJの髪がせー...

男子だけじゃねえのかよ！女子もかよ！

「冗談はここまでにして。

「午前九時から、記念館でやるからなー全員移動しろー。」

：なんだこの統率力。

全員が記念館に移動を始める。

ちつ、行かんわけにもいかんからなあ。  
めんどくさいが行くか。

しかしそれかは、どうでもいい。何よりも、彼の言葉が心地いい。

俺の方を見やがつて。

ん〜〜〜、やつぱり疑われてんのか?  
な〜んか、嫌〜な予感しかしないし、  
カツター持つていいくか。

レイ side

「やつぱいたじやん。そんな人」

一二二  
モニタ格子

「そーかなあ

「たぶんメガネを外せば……。」

と、そこまでいってメガネをはずした姿を思い浮かべてみた。  
あれ？既視感。<sup>デジャブ</sup>

ま、いつか。

「おー！」

菅谷 side

いよ、こやつ

この清明学園、高校二年生ながら

この渋田学園  
高橋一五年生が前にしての  
方の恩』

「うー、菅谷？」「

「…おい、菅谷？」

「何だよ、邪魔すんなよ龍牙、せつかく集中力高めてたのに。」

「後五分、後五分だ！」

「いやあ、その荷物、何？」

「ん～～～？メガホンに、レイ&リヒうちわに、会員証に…。」

「もういい！お前何者だ！？そんなもん常に持ち歩いてんのか！？」「当たり前だ！いつ、どこで、何が起きてレイさんやリヒさんに会えるかわからんからな！」

「どんな天文学的数字だよ…」

「だがそれが起きた！会員NO.00114のこの俺が！全力で応援します！」

「因みに何人ぐらいいるんだ、そのファンの人数？」

「かるく100万人は超てるだろうな。」

「初めてお前がすげえ、と思つたよ。」

「おっ！暗くなつた！始まる…始まるぞ！」

「みんな、おっ待たせーーー！」

「はツじめつるよおー！」

わああああああああああああつ！！！！

いよつしゃーーーーーーーー！喉が張り裂けても！叫び続けるぜ！

隣にいる龍牙が「つづるせえ」とか言つてたので、殴つといった。

## 風の前の風（後書き）

作「視点が変更しまくつですこません。」

幽「見にくいいな…」

作「分かってることを言ひな…」

幽「俺は、お前の心にねちねちダメージを叩えて、

再起不能にすることを目標としている。」

作「俺のキャラクターなのに、そんな恐ろしいことを…。」

幽「…まあ、みなさんの目を汚さないためにも、こじりこじりぶしておいた方がいい か。」

作「ちよつ、…逃げるつ…」

幽「あつ…現実と同じで逃げ足だけ早いな。まあいい。そのうち…な。」

それじゃ、また次回。」

## 突然の・・・！

リエ side

「さあ！みんな！はつじめるよーーー！」

おおおおおおおおおおおおおおおつー

曲名を私が言おうとした、瞬間。

全部の照明が消えた。

はれ？なんかのミスかな？

と思つてたら、

「つー！『リヒト・ベフォルゲン』！ー！」

レイの声が聞こえてきて、観客席を覆つ光の盾ができた。

「ぐつ！…くつそ。」

男の人の声がした。

そしてレイの光の盾で見えた相手は…

「オプキユリアス！？…しかも、上位！？」

「リエ！緊急事態だよ、戦闘態勢！」

「うん！ー！」

私たちは足元に魔法陣を展開して、タイムトラベラーの能力を引き出そうとした。

人間生活じゃ、タイムトラベラーの能力は有り余るから普段はゼロフォーム、と

呼ばれる形態で生活している。

けど、

「せんー！」

「わつとと…」

「ちえつ。」

いきなり迫つてきたせいで、魔法陣から離れるを得なくなつた。  
うーん、めんどくさいなあ。

「じおーする？」

「・・・とりあえず

「ん?」

レイは近くにあつたマイクを手に取り  
「皆一サツサと決めちゃうから少し待つてね!」  
なーる。

無駄な混乱を避けるつてことね。

とはいえ、反応がない。

いきなり起きた事だからしようがないか。

「…アンダーーン(変身)なしで行くよ。」

「へ?」

「肉体強化の魔法掛けるか?」

「はあい。」

「話している暇があるのか?」

「ちよつ! !」

私は槍型の武器、センソリーウムを呼び出し、防衛する  
相手が長剣でものすごい力で押してくる。

「『フォルマカオ』! !」

すんでのところで、レイの魔法による肉体強化が終わり、持ちこた  
えられるようになつた。

とはいえる、ゼロフォームでの魔法はさすがに弱い。  
さつき、レイが敵の突進を防げたのは属性とか色々つけていなかつ  
たただの突進だつたからだろ? つ。  
「この程度か。」

「どこの安い敵のセリフよ。」

「フン。『ダークウーブ』! !」

「へつ! ?」

闇の波に私とレイは飲みこまれた…。

龍牙 side

…ゼロフォームであれだけの魔法を使い、無強化の状態での圧力

に一瞬耐える。

どうやら、それなりに強い奴らのようだ。  
だが、この状況はまずいな…。

あの二人がダークウェーブに巻き込まれて、吹き飛ばされている。  
闇の力をただ放つだけとはいって、ゼロでしかも至近距離で受ければ体には相当ダメージがあるはず。

おそらく立ち上がれんだろうな…。

つーか、周りがうるさい。

案の定、身動きが取れなくなっている状態のところにまたダークウェーブをぶちこもうとしている。

…さらにもうさくなつた。

それにしてもいつも思うのだが、昔の人の短絡的思考はなんだろうか？闇の波だからダークウェーブって…。  
ま、決まってしまっているものは仕方がないか。  
つと、そんな場合じやなかつたな…。

（ちつ…。）

俺は両手にカッターでアスタリスクの記号の傷を刻み込むとその場に立ちあがつた。

レイ side

「痛つ…」

立ち上がれない。

防御も間に合わなかつた。

なんとか保つてている意識で周りを見ると、目の前で倒れているリヒがいた。

強化されていたおかげで零距離でもなんとか死んでいないようだ。  
けど、もう目の前に手に闇をためた敵がいる。

ここで、終わり…？

せっかく、楽しい学校生活が出来そうだったのに…。

皆と笑つたり、映画見に行つたり、たまには喧嘩したり…。

修学旅行とか…色々…。

ヤバ…、涙…が…。

誰でもいい…、神でも、悪魔でも。

誰か…、誰か助けてよ…！。

その時、声が響いた。

「アスター<sup>ダブリュー</sup>ス<sup>ダブリュー</sup>ク・「<sup>ダブリュー</sup>ード！」<sup>ダブリュー</sup>！」

突然の・・・！（後書き）

幽「いきなりのバトルかい。」

作「あまりにも牛歩だつたからな。」

幽「それにも…」

作「ま、いいじゃん。それより、アスタリスクついていたくないのか？」

幽「痛いよ。それなりに深く刻むからな。」

作「そうした理由はまた次回。」

幽「見ている人はいねえよ。」

作「…自己満足で進めていきます。」

## アスターиск - フード (前書き)

作「サッカー観戦しながらの投稿です。」  
幽「今日は俺の独壇場！」  
作「そんなことどうでもいいんだ！」  
幽「本文否定！？」  
作「感想が来た！」  
幽「マジか！？」  
作「誤字指摘だったけど、めっちゃうれしいです！..」  
幽「へえ~~~~。」  
作「ありがとうございました！」  
幽「じゃあ、本編行きます。今日は少しグダグダしてるかも。」  
作「ウザつ、と思つかもしれません。」  
幽「とりあえず、どうぞ。」

## アスタリスク・「ード

? ? ? side

「アスタリスク・「ード『<sup>ウエーブ</sup>W』……」

俺がその声の方に振り向くと、目の前が赤黒い力の塊で埋め尽くされていた。

とつせに右手にためていた闇の力で相殺しようとしたが、圧力が凄まじく、押し負ける。

俺は後ろに吹き飛ばされ、壁をぶち破った。白煙が立ち上る。

しばらくして、煙が晴れた先にいたのは、

…見知らぬ少年だった。

龍牙 side

「大丈夫ですか？」

俺は奴を吹き飛ばした後、すぐに光さんとリエさんのところへ行つた。

光さんは問題がなく、リエさんも気絶しているだけのようだった。観客席の方から、色々聞こえてくるが、無視。

「え、君は…？」

光さんの口から驚きを含んだ声が漏れてくる。

「僕ですか？…あんたらが探していた人だ。」

「へ？」「

「そこで、倒れとけ。気付いてないだろ？が、体はだいぶボロボロだ。」

「は、はい…。」「

…少し赤くなつてゐがなんでだ？

おつと…。煙が晴れてきたか…。

「誰だ…？お前…？俺はお前みたいなのがいる、といつ情報は持つてないが…。」「

「そりや、そりや。俺は、休暇中の身だからな。」「

「休暇中…？」「

「ま、どーでもいい話だ。」「

「…殺すだけだ。」「

いきなり、加速してくる。

…頭悪いのか？

「アストリスク・「ード」<sup>チャクラム</sup>」

俺は、振りかぶつてきた剣に對してチャクラムを添える」といひ、軌道を変える。

つまり、受け流した。

「なつ！」

「予想外、だつたか？」

チャクラムを上からたたき下ろす。

が、つんのめつた体勢からバック転をする、といつ離れ業をされ、避けられる。

「あの体勢からバツク転かよ…。ありえねえー。」

「簡単にやれると思うなよ…。」

「…リエさんがあ前の攻撃を無強化状態で一瞬とはいえ踏みとじまれたこと、

さらに今の動きから考えると、お前、スピード重視だな。」

「…それがどうした。今のお前じゃあ、俺にはついてこれん。それがわかつただけだろ。」

「それじゃあ、変わればいい。」

「何…？」

「アスタリスク・『ード』『A』…！」

自分の世界を一変させる。

ただ速く。体の能力を速さだけに特化させる。

「それじゃあ、お前にならつて…。」

「…？」

「よーい…、ドン…。」

ダッシュ…！

人間の限界を超えて走る。いや、齧ける。

「消えろ…！」

「へうつ…！」

チャクラムによる一撃をギリギリでガードしていく。

が、チャクラムは一本ある。

俺は相手に反撃のすきを『えな』いよう、追撃を加えていく。

「どうした？ 手も足も出でていないうだが？

「隙を見つけようとつ！してやつ！だけだ！」  
「ほーう。アスタリスク・コード『P』！！」

今度は体の能力を力だけに特化させる。

「え？ 何で片一方ずつにしか特化せられないのかつて？  
アスタリスクの欠点、其の一だ。

アスタリスクには武器を取りだす、能力強化、特殊、の三つの種類  
がある。

特殊って言うのは、Wの<sup>ウェーブ</sup>ような奴だ。

そして、アスタリスクはこの三つをそれぞれ一つずつしか使用でき  
ない。

だから、P<sup>フィジカル</sup>とA<sup>アビリティ</sup>は併用できない。

俺は相手の剣を力任せに弾き飛ばす。

一瞬生まれたその隙に、力任せにチャクラムをねじ込む。

「がはあああつーーー？」

「ぐらえつーーー！」

右手を突き出し、叫ぶ。

「アスタリスク・コード『W』！」

赤黒い力の塊が相手を飲み込み、吹き飛ばした。  
…やつべ、やり過ぎたか？

? ? ? side

くそ、何なんだいつは！

俺のスピードが一切通用しない！

どれだけ、攻めようと思つても圧倒的な攻撃量の前に防御に回りき  
るを得ない。

しかも、今まで見てきた型のどれにも当てはまらない……。

いや、変幻自在と言うべきか？

とにかく対応しきれない。

立ち上がる。

体中がギシギシと変な音を立てている。

とつさにガードしたんだが……。

血も出てしまっている。

…負ける。

その思いだけが頭を駆け巡る。

こいつは俺たちにとつて脅威だ……。

ならば、せめて一太刀だけでも……。

龍牙 side

少しだけふらつぐ。

血を消費しそぎてるのか……。

アスターisk・コードの欠点、其の一だ。

力には常に代償がいる。

アスターisk・コードは血の消費をしなければいけない。

だから、C<sup>チャクラ</sup>やW<sup>ヌエーブ</sup>は赤黒い色をしている。

遺伝子レベルの違いがタイムトラベラーに人間とは違う力を持たせ

ている。

つまり、細胞一つ一つには力がこめられている、といつ事だ。  
血による力の使用ができるのはこいつた理由からだ。  
相手が立ち上がった。

目の色が変わっているな……。

俺に怪我を負わせようつとでも……？

「無駄だ。お前と俺では圧倒的な差があり過ぎる。」

「それでも、俺はやるんだ！お前は俺たちにとつて脅威になる……」  
の……化け物が……

「……」

化け物……か。

昔はそうだったな……。

いや、呼ばれていたが正しいか。  
だが……！

「俺は、もう化け物じゃねえ！アスタリスク・コード『A』……！」  
「こいつ……！」

俺は今までの速度を超える速さで駆ける。

相手の顔がスローモーで驚く表情に変わるのがわかる。

「アスタリスク・コード『A』……！」  
「くそつ！」

相手の本能が剣による防御を行つ。

無駄だ！

「俺は……俺は！タイムトラベラーネットワークリーダー十代目！陣流……幽人だ！」

渾身のアッパーをたたきこむ。

剣は折れ、こぶしが相手の腹に突き刺さる。

「ぐううつー？」

「てめーの世界に！帰れえつ！」

アッパーを振り抜く。

相手は高々と飛び、消えた。

逃げたわけではない。

この世界における死を「えられただけだ。

自分の世界ではない、別の世界で死を「えられる。

そうすると、致命傷の傷が治って、元の世界に戻ることが分かっている。

一説によると、世界が別の世界の生物の死を歪みと捉え、その歪みを正すためでは、と言われている。

……あーー、ふらつく。

さすがに血の消費量が半端じゃない。

とはいって、アスタリスク・コードの欠点、其の三が浮き彫りにならなくてよかつた。

其の三は、バリエーションがない、だ。

このアスタリスク、かなり昔に作られたもので、古い文献しか残つてなかつた。

そこには、アルファベット26字に割り振られた技が書かれていた。

しかし、いくつかはかされており、判読不能。

俺が使えるのは少ししかなかつた。

今回は相手が弱かつたから助かつた、と言えるだろ？

…………つーか、この後、どうしよう？

俺、ばれちゃつたよ？正体。

「龍牙……いや、幽人君！」

あーー、やつぱり？

「奏谷たち呼んだから。事情説明してよねーリーダーさん？」

はあーー？

「何してんだ——————つ——————！」

## アスタリスク・コード（後書き）

作「幽人のダメージ、貧血だけかよ…。」

幽「俺は、最強設定だからな。」

作「因みに、Aの上にアクティブ、と書かれてはいますが、こいつ実は、エーとしか言ってません。他のも同様です。」

幽「メンドくせーもん。」

作「お前はまた…。」

幽「他にもいろいろあるんだが…。」

作「次から、能力解放しちゃうもんなあ。」

幽「授業中、必死で考えたのにな。」

作「ま、どこかで補助的に使いたいと思います。」

幽「じゃあ早速、アスタリスク・コード『D』『D』…！」

作「そ、それは相手の精神内に飛び込む奴じゃ…。」

幽「お前ぐらいい弱いか、無抵抗時しか使えんがな。」

作「ひどっ！」

幽「つぶれろ！」

作「ぎいいいやああああああああああああ！」

幽「気絶したか…、それじゃあ、次回に続きまーす。」

## 幽人の元日常。（前書き）

作「PV1000突破！ユニーク300突破！」

幽「良かつたな。」

作「ひとえに皆さまのおかげです。」

幽「今後ともよろしく頼む。」

作「それと、一つお知らせがあります。」

幽「何？」

作「後書きでな。」

幽「・・・なんだ？とりあえずどうぞ、今日も駄文です。」

作「つて、おい！」

## 幽人の元日常。

リエ side

あー・・・。いつたーー・・・。

頭を打つたせいか、フラフラする。

ぼーっとする頭で、思い返してみる。

えーーっとお、私は10月24日に生まれてえ。

確か、13時46分だつたけ。

それでえ、幼稚園行つてえ、小学校行つてえ・・・

つて、違う！もっ私は高校生だ！！

そーだよ、オプキュリアスが攻めてきたんだつた！

戦いはどーなつたの・・・？

ん？レイと・・・龍牙君？

何で言い争つてんの？

おぼつかない足取りで、近づいてみるとこした。

龍牙 side

「ふつざけんな！！なんであいつら呼んだんだよ！」

「そんなんに怒る事じゃないでしょーがー！」

「今あいつらに来られたら、ボツ「ボツ「！」にされんだよ！」

「何で？」

「レーイ、何があつたの？」

「リエ。」

「お田覚めか。」

フラフラとおぼつかない足取りで近づいてくる。

頭にダメージが来ているようだ。

・・・あんだけ吹つ飛ばされて、よくそんなんで済んだな。

「・・・りゅーが君? だよね。」

「いや、俺の本当の名前は陣流幽人。お前らが探してた奴だよ。」

「へ? でもでも、・・・似てない。」

「わいおー、あたしもついでいたんだが、わいさんの奴を倒しちゃう

「おもい！」

なんか、向こうだけで盛り上がり始めたので、逃げる準備をする。

卷之三

「駄目だよおー。逃げちや。」

「ニギ、ハナハナトウル。」

常套句 たね

くそつ！幕喰向で済ませた！

しかも、両側を挟まれた。

やはい 亥一亥と 死が近づいてゐる

「龍牙——！！！」

- 111 -

月の前が眞の音一

じゃねえ！生徒で埋め尽くされてる……。

「アーティストの心」――アーティストの心とは何ぞ

「龍牙君！奏谷君紹介して！」

—俺にも今の出来るのが！？

一人の声に全員がぴたりと声を止める。

あの騒ぎを一声で・・・  
色々すげえ・・・。

「色々聞きたいことはあると思つたけど。ちょっと、用事があるからさ、少し待つてくれないかな。」  
「はーい！ー！」

・・・ここから、リーダーしてもらおうかな。

「あ、メール来た」  
「なんてえー？」  
「後一分ぐらいだつて」  
「いつ・ふ・ん！？」  
「うん。」

その瞬間、空に白い穴があき、五人の人が降ってきた。

奏谷 side

「ぐふえ！」

一番最初に落ちた俺は、残りの四人全員を受け止める形になつた。  
・・・漫画でよく見そうな光景だ。

「お前らサッサとじけよーー！」  
「いめんじめん。」  
「わりい。」

四人が口々に謝るが、全然罪悪感が感じられない。

「つたくよー。」

全員が下りたので、俺も立ち上がり出す。

「ん？」

少し暖かく、かたい感触。  
下を見ると、

「あつ！ ゆ、幽人！」

「てめえら・・・！」

どうやら、降りた先に幽人がいたらしい。  
これまたベタ・・・。

「謝れえーーー！」

「すいませんでしたーーー！」

「よしー！」

こいつにマジでキレられると、こいつが今、ゼロフォーム以下のフ

オーム・・・  
マイナスフォームにいるとはいえ命を危険にさらされる。  
・・・が、今の俺には関係ない。

「キレるのは俺のほうだろ？、ゆ・う・と君？」

「・・・なんの事でしょーか、秦谷君。あ、いや待って、そんな殺  
氣出さないでー！」

「今はノリで謝ったが・・・分かってるよな？」

笑顔で聞く。

「はい・・・・」

「一年も帰つてこんで、俺の苦労を知れえ――――――」

「げふうつ――――」

かるく、三メートルは飛んだな。

まあ、手加減はした・・・。

さすがに死なれたら困るからな。

「幽人君が言つていたのは、このことだつたんだね・・・。

「ま、一年も帰つてこない方が悪いけどねえ」

「

龍牙 side

軽く死ねる・・・。

なんとか起き上がると、誰かが手を出してくる。

「ほらよ。」

「あ、ワリい。」

こいつはフ<sub>H</sub>イト、男だ。

本名は笛井 ふえい 鳯人 そりひと。

略して、フ<sub>H</sub>イト。

・・・我ながら無理やりだと思つ。

文句なら秦谷に言つてくれ。

「せいつ！」

「おわつ！」

背負い投げ！？

「とつた――！」

「キヨ！？ぐふうつ！」

今、肘鉄してきたやつは、唯村 ただむら 清見 きよみ 因みに男。

肘鉄ではね上げられ、床に落ちる。

「ちよつと、三人ともやりすぎだよ。」

急いで、魔法で回復してくれるのは、ソフィア。こいつは、まんまソフィアだ。

「『リミッタル（回復）』」

「ま、ショーガないさね。」

ケラケラ笑いながら、傍観しているのは、ネル

本名、谷村 練巳 たにむら れみ

練から、練る、でネル・・・。

文句は奏谷な。 奏谷。

「いてて・・・。何で！？」

「お前がやつていた仕事が大変なんだよ！」

「俺たち三人でやつて、それぞれ一時間かかってんだぞ！」

「それを俺は一人でやつてたんだよ！一時間で！文句言うなー！」

「一年も約束の期限を延ばしやがつて！」

・・・はあ。疲れる。

「はいはい、もういいでしょ、奏谷。」

「そうだよお～。幽人君をとつと本部に連れ帰らなきゃ。」

レイとリエが囁く。

二人ともすでに力を一段階解放して、体の傷を回復している。

「そうだな・・・。」

奏谷はそう言うが、俺は帰りたくない・・・。  
こんなに騒がしい日常になるんだぞ?  
・・・ま、楽しいからいいか。

## 幽人の元日常。（後書き）

作「本文で触れてないですが、レイとリエはソフィアとネルから幽人について色々教えてもらっています。」

幽「あいつら・・・俺の力が戻つたら・・・！」

作「ゆ、幽人！おちつけ！」

幽「あ。お前がいたな。」

作「ちよつ！待て！」

幽「ま、あいつ等にしないと気がすまん。」

作「セーフ！あつぶねー。」

幽「ところで、お知らせつて？」

作「ああ、実はｐｓｐが・・・」

幽「使えない？」

作「そう。なので、これからはｐｓｐ中心になります。」

幽「・・・つまり、駄文を長く読まないといけないわけね。」

作「そんなわけで、更新も微妙になつていいく、と思います。」

幽「こんな作者だが、・・・まあ、見捨ててもいいぞ。」

作「つて、おい！・・・じ、次回も宜しくお願ひします！」

## 幽人、久々の帰宅（前書き）

作「ようやく、手直しました。」  
幽「ほほ、何も変わつてない気が・・・。」  
奏「ああ。俺もそんな気がする。」  
作「うおー！いつの間に！」  
奏「なかなか、呼んでくれないから、一いつちから来た。」  
作「二人・・・だと・・・」  
幽「楽しくなるな！」  
作「いやだあああああ！」  
奏「ま、そう言つな。」  
幽「それでは、どうぞ。」

## 幽人、久々の帰宅

龍牙 side

はい、というわけで本部にやつてきました。  
中の様子はほとんど変わってない。

その後、先生に無理やり、無期限に学校を休みます的な書類を出した。

全員には「その内帰つてくるから」とか言って、質問を全部ぶつちぎつてきた。

少しひどい？ 知るか。

「幽人、これ渡しとくから後でチームルームに来てくれ。」

「・・・何これ。」

「『解針』だろ。」

「あ、あれね。すっかり忘れてたわ。サンキュー。」

「解針つて？」

レイが聞いてくる。

因みに、あの後ライブは続行きよつこう

その間、俺たちはボーッとしてた。

「解針つて言つのは、幽人がマイナスフォームからゼロフォームに移行するためのものなの。」

ネルが答える。

こいつ、いきなり学校にファンクラブ作りやがった。  
奏谷が少し嫉妬していたのが、ウケた。

「何で必要なの、そんなものが・・・

「マイナスフォームはタイムトラベラーの力を極限まで抑えたもの。つまり、ゼロフォームに移行するための力なんて、全然ない。だから外部から力を加えることによって移行しないといけない。それがこの解針なんだ。」

「・・・そんなフォームに変身する意味って？」

「ゼロじや普通の人間と生活するには力があり過ぎるんだよ。例を上げると、さつきの敵を『コロボン』で倒せるぐらいが俺のゼロフォームだ。」

「・・・納得しました。」

俺は、説明を終えた後、自分の部屋に行くことにした。

「・・・だーれも掃除してくれなかつたのかよ。かなりほこりが落ちている。」

だが良く見ると、俺の机のところまで往復した足跡が残っていた。

「誰かが何か取つていつたのか・・・？」

おれはそう疑い、机のところまで歩いて行つた。机の上を見ると、見たことのある形の大剣と銃が二丁、そして手紙が置いてあつた。

『綺麗にしておきました。レイ&リエ』

「・・・何をだ。」

どこも掃除されてないじやん。この部屋。

「・・・あ、この武器のことか？」

これを掃除するぐらいなら、部屋を掃除しといってくれ・・・ま、ありがたいっちやありがたいが。

でも何でこの二人なんだ？

剣に光の力を流してみる。

刃が光の力で構成される。

この両刃の大剣は銘を『ディヴァース。

何語かは忘れたものの、確か『分割する』という意味だ。中央に線が入つており、そこで一つに分けることが出来る。ま、二刀流に出来るつてことだ。

因みに、刃を構成できる属性は多々ある。まだ色々あるんだが・・・。

とりあえず、俺は大剣と銃二丁を携え、チームルームに行くことにした。

フェイト side

つてなわけで、俺のターン！

・・・ウソです。引かないで。

今、俺たちは幽人と別れた後、時間を潰している。三十分後に集合予定だ。

このタイムトラベラー本部は、他の支部もそつだが、かなり設備が整っている。

支部は世界中にあり、数は・・・覚えてない。

大体、国会に属する場所の地下深くにある。

商業設備はもちろん、娯楽施設から何から何まで揃っている。通貨はその国のものになる。

だから、各支部、本部には交換所がある。

・・・正直面倒だ。特殊な通貨を作つて、タイムトラベラーの中だけで流通させればいいのに。

ただ、かさばらないように、タイムトラベラー内では電子マネー方式が使われている。

というか、ココだけの話、タイムトラベラーでは、科学が地上よりもかなり進んでいる。

理由？それはな・・・おつと、時間か。

そろそろチームルームに行くか。

龍牙 Side

俺は今チームルーム前にいる。

チームって言うのは、文字通りタイムトラベラーが何人かが組んで作るものだ。

文句は奏谷だ！後、悪乗りしたフェイトだ！

全員談笑中。

つーか、このチームが始まってからずっとこんな感じな気がするんだが。

ま、楽しいのか一番なんだけど、

・ いじめますか。

「おい、早速だが、俺流の訓練を久しぶりにするぞ。」

レイとリヒ以外の全員が音速で立ち上がり、ドアから逃げ出すと、ふ。

マジで音速だった。そこいら辺が、ソニックウェーブで吹っ飛ばされてる。

だが、俺は予測済み。

「『ナウ』・マヤマ」

炎の壁が入口に立っていた俺の前に立ち塞がる。

「嫌だ！」

「通せ！幽人！」

「お前の訓練は訓練じゃない！イジメだ！！」

「そーよー！」

「一日は普通の生活できないのに……」

「嘘偽りうしたの！？」

「慌てすぎだよ？」

俺は笑みを浮かべながら、

「さ、訓練室に行こうか？」

「……いやだー」「……」

ダダをこねる五人を引きずり、さらに状況を理解していない二人を連れて訓練室に行く。

・・・さあ、訓練と書いてイジメといつものワンサイドゲームを始めようか。

## 幽人、久々の帰宅（後書き）

幽「次回が楽しみだぜ……」

奏「なんとかしてくれ！作者！」

作「いや……。こいつには逆らえん……。」

奏「そんな……俺たちを殺す気か！？」

幽「安心しろ、一日ぐらいで元に戻るようにしてやるから。」

奏「そんなこと言つていて、二日かかつただろうが！」

作「あ、そうなの？」

奏「もう嫌だああ……」

幽「……再起不能か。」

作「じ、次回に続きます！！」

## 特訓（イジメ）開始！！（前書き）

後書きとか、その他もうもうは後です。

## 特訓（イジメ）開始！！

レイ side

訓練室に到着です。

最強と呼ばれているランクZ 幽人の訓練。

・・・みんな怖がってんのが気になるんだけど。  
あ、ランクの説明まだだつたね。

ランクは強さを表わすもので、D、C、B、A、S、T～Z  
までの、えーと12？段階に分かれてるの。  
Zはリーダー限定で、今は三人。

当の私は・・・S、このメンバーの中では一番下のランク。  
といつても、三人いるんだけどね、このチーム内には。

「よし、設定完了。」

幽人が訓練室の設定を終えたみたい。  
さて、どんな事が起こることやら・・・。

キヨ side

もうヤダ・・・。

またあの訓練が始まるのか・・・。

「幽人～考え方ねえの～？」

俺が愚痴る

「あの時の仕返しだ。」

・・・やらなきゃよかつた。知らない人は少し前の話を参照。

「ささ、入れ。」

幽人がにこやかな笑顔で言う。

対女子だつたら異常な威力だろ？

ん？

・・・確かに威力は強いな。

レイヒリエが少し昇天しかけている。

人の夢と書いて儂い。

幽人は恋心などとは無縁の存在だ。

あいつらが無残に撃沈しないことを祈る。

他のメンバーが渋々、特訓室に入つていく。

因みにこの特訓室、空間を拡張しているので、大体300～400

ぐらいある。

この中は少し特殊な空間になつてているんだが・・・

「キヨ、入れよ。」

「ああ、ワリい」

幽人にせかされる。

ま、死ぬわけじゃねえし。

腹くくりますか。

龍牙 side

さて、今全員が特訓室の中にいる。

俺は、性質上、VRルームの方が良いんじゃね？

と提案したんだが・・・

八代目と九代目はこの名前に愛着があるらしく、却下された。

性質上、VRルームの方がいい、というのは、

この空間では、攻撃はすべて空想となる。

簡単に言うと、実体のない攻撃と言えばいいだらうか。

熱さは感じないし、痛みも感じない。

・・・じゃあ、なんであいつらが怖がっているのかって？

確かに実体はない。

けれど、その実体のない攻撃に当たると、外に出た時体力を削ぎ落とされる、

とこうおまけが付いてくる。

あいつらは、その体力を限界を超えて削られるのを怖がっている、  
といつわけだ。

「始めつぞ～」

「「「「」」」

「「はーい」

・・・言わなくともわかるよな？

「んじや、一人ずつ来い。とりあえずな。」

「はあ～、仕方ない、やりますか。」

・・・珍しいな、奏谷

デカイ剣を持って奏谷が出てきた。

「俺だつて今まで何もしてこなかつたわけじゃないんでね。試してみたい、といつのがある。」

「ほーう

俺もディヴィアースを構える。

「奏谷、頑張つてね！」

「任せとけつて」

ネルの前では、少し性格変わるんだつたな、あいつ。

あ、因みに一人は付き合つてゐる。  
俺？キヨーミない。

「いくぞ！」  
「来いつ！」

奏谷が大剣を大きく振りかぶり

「『じんくうれつぱせん 真空烈波斬』！！」

「俺のを我流に改造したかつ！」

真空波が飛んでくる。

因みに、現実世界では真空でモノが切れる、という現象は起こり得ないそうだ。

つまり、あれは魔力の塊。

「よつ・・・・ヒー！」

ディヴィアースの刃の部分で受け流す。

刃は光で構成されているため、魔法を受け流すことが出来る。

「ちえつ。」  
「お前に、マホーは似合わねえよ。」  
「だろうな。」  
「油断すんな！」『えんくうれつぱせん 真空烈波斬』！！」

さつきのを炎で構成したものを奏谷に飛ばす。

「ちゅつ・・・・おわつとおー！」

ギリギリで避けられる。

身体能力の高さは変わらず……いや、より高くなつたか？

「……ま、そこそこかな。」

「お前から見たらそんなもんかよ……。」

「ま、そう言うな。」

「くそつー。『ディープレッサ（走）』……」

身体能力を著しくあげる。

俺のアスタークス「コード」はまるで比べ物にならないぐら<sup>い</sup>い上がる。が、俺も今は違う。

目の前に向かつてきた剣をディヴァースで受ける。奏谷の勢いは止まらず、一撃、二撃と加えてくる。

「ほつー！」

奏谷の剣と垂直に交わらせ、つばぜり合<sup>い</sup>いに持ち込む。

「しまつ・・・・！」

「まずは一人目だ！『ロッヘ・アンウェッタ（炎の暴風）』……」

「！！！」

奏谷が炎に包まれながら吹つ飛び。

え？ VRだろつて？

吹つ飛ばないと現実味がないだろ

因みに、今のが現実なら体中が引き裂かれるというおまけが付いてくる。

「……大丈夫かー？」

なんとかフュイトとキヨに受け止められたようだ。

「・・・おれ、外出たくない。」

「さて・・・次はどうだ?」

俺はにこやかな笑顔で聞いてやつた。

現実逃避が一番だ!!（前書き）

作「非常に遅れてしまいました・・・すいません!!」  
幽「くくく。」  
奏「んだよ、幽人？」  
幽「これで誰も見なくなつたな!!」  
作「怖いことを言わないでくれ・・・」  
レ「見～す～られた～」  
リ「作者～」  
作「うつさい!!」  
幽「本編行きまーす」

## 現実逃避が一番だ！！

リエ side

・・・やらなきゃよかつた。  
心からそう思った。  
ま、やるしかないんだけど。  
すでに、例の五人は、

「これ以上したらマジで命にかかるから」とか言ってVRルームの隅で休んでいる。

それぐらいに激しい攻撃だつた。

圧倒的な戦闘センス。

それしか感じられなかつた。

因みに、奏谷はあの後五回立ち向かつたけど、全部吹つ飛ばされていた。

で、私たちは初めてだから、レイと二人で戦うことにして。

「さてと、わざと終わらせるか。」

「そう簡単には終わらないよ！」

「リエ・・・それは死亡フラグじゃ・・・。」

「気にしない！ 気にしない！

私はセンソリウムを出して、戦闘準備をした。

レイ side

リエがセンソリウムを出す。

私は中央に魔力を増幅する機械を取りつけた一枚の円盤を取りだす。銘は『トラベツサ』。

このトラベッサは円盤の周りに魔力で刃を作り、チャクラムのようになることができる。

つまり、遠距離兼近距離武器、と言つたところかな。

読みづらい？

気にしちゃいけないよ。

しかも、これは一枚あつて遠距離操作をして敵をオートで攻撃できるすぐれもの！

さらにさらに、枕をプラスしてお値段は驚きの

！！

「レ～イ～？まーた脳内テレビショッピングしてんの～～？？」

「～～～、こめん・・・。」

「その癖、止めなよ～。」

「おーい！はじめんぞ！」

幽人が早くしたそうでウズウズしている。

・・・うだなあ。

私はトラベッサを構える。

「よし！始めんぞ！！」

「レイ！いつもの！」

「うん！『フォルマカオ』！！」

全身強化の魔法をリエにかける。

力を開放しているからあのときと比べて断然違う。

リエの身体能力が跳ね上がる。

「さあ、行つてこーい！」

「レイは何時も無責任だよねえ～」

リエが愚痴るけど、気にしない、気にしない！

幽人 side

リエが突っ込んでくる。

直線的な動きだ。

手で槍の柄を掴み、止める

「あつつつーー！」

「あはははーー！」

急に槍が燃え始めた。

何だ、こりや！

「どーよー！」

「・・・まさか、精神感応物質？」

「・・・おつどひきー。まさか当てるとはね。」

まじで？

精神に反応するってことは、ちょっとでもなんか別の精神が入つてしまふと別の事が起る。

そんな、超不安定物質を武器に流用するとは・・・。

「ほつー！」

「くそつー！」

いきなり炎に包まれた槍を振つてくれる。

ディヴァースでギリギリ防ぐ。

くつそ、油断した・・・。

片手でディヴァースを持ち、センソリウムを防ぎながら右手を突き出す。

「『ロッヘ・アンウェッタ』！」

「へつー・ひよつー・

リエがセンソリウムを盾に替えてくる。  
そんな」とまで出来んのかよ・・・。

「うー、強化してんのにー。片手で防げんのー?」

「ま、俺が規格外なだけだ。」

「ちえつ。」

つていうか、飛びすぎだろお前。  
レイのそばまで飛んでいる。

・・・なんか、ゴー・ヨゴー・ヨしてんだけだ。

すると、リエがセンソリウムを長い筒に変化させた。  
俗に言づ、ロケットランチャー・・・か?  
レイがトラベツサを浮遊させ、そのロケットランチャーの前に安定  
される。

「・・・面白そうだ。」

俺はこいつそり呪文を唱える。

「レイー。行ける?」

「オッケー! 行けるよーーー!」

「よししー逝つけーーー!」

ん?

・・・漢字違うよな?

「リエとレイの~特別攻撃!~!  
ダブルアール・スペシャルアタック

膨大な量の光の力が放たれる

・・・よし、あいつらにネーミングセンスというものをいつか教えてやろう。

「対魔法用魔法陣展開。」

大・中・小、三つの円が並んだものが出てくる。  
大と中の間には複雑な文様が描かれている。

「『アブソルブショーン（吸）』」

膨大な光の力は、魔法陣に当たると全て吸い込まれてしまった。  
複雑な文様が少しだけ光る。

・・・こんなもんか。もつちょっとといけると思つてたんだけどな。

「へ？」

「はい？」

驚いているが、無視。

そろそろ俺も疲れてきた。

「『ロスラッセン（解）』！..」

魔法陣から光の放流が逆流していく。  
すでに俺の魔力もプラス済み。

「ほえ！？リヒト・ベフォル・・・・！」

・・・あ、間に合わなかつたかー。

膨大な光に巻き込まれ、一人が吹き飛ぶ。

白煙の匂いの側から

「これ大丈夫なの〜!?」

「リヒ・・・あきらめた方がいいよ・・・。」

「う~。」

とか聞こえてくるが、井、レイの壁とおつあわいみてくれ。

「わ~・・・全員出るぞー。」

俺がだらけている五人に言ひ。

「俺、ここで一生暮らすわ。」

「何言つてんだ、キツ」

全く・・・

「俺もー」

あれ? 奏谷君?

「あたしも」

おーい、ソフティア?

「ここに家建てようが

フヒイト・・・

「あ、それ良ーね」

ネ  
ル  
。

ル・ル・ル・ル・ル・ル

「離れ離れ……。」

卷之二

首根つこをひつつかみ出口に向かう。

ため、何もしなくともついてくる。

卷之三

ま、いつか。

特訓後の日常。（前書き）

幽「そろそろPVA4000超えそうだな・・・」  
作「・・・そうだが？」  
奏「また何かする気かよ？」  
幽「というわけで、特別企画をしよう。」  
作「なにするんだよ？」  
幽「ま、俺に任せとけよ。」  
奏「なにする気だよ・・・。」  
作「なんか怖いんだが・・・。」  
幽「くくく・・・。んじや、本編行きまーす。」

## 特訓後の日常。

レイ side

頭がボーッとする。  
白い天井が見える。

えーっと? 確か、特訓室から出た瞬間に気が遠くなつて……。

「ひやーつー?」

頭に鋭い感覚が走る。  
冷たいタオルがのせられてる。

「・・・あれ? 起きてた?」

頭の上から幽人の声が聞こえた。

幽人 side

「一番早く目が覚めたな。」

とはいって、丸々一日寝ていたがな。

「うー、ギシギシする・・・。」

「あんだけの激しい動きの後、ストレッチ無しだつと寝てたから  
な。」

俺がしてやつても良かつたんだが、流石にな・・・。

「ハハは?」

「・・・答えなきやだめか?」

「・・・病院ですね、はい。」

まあ、レイが言った通りここは、タイムトラベラー内にある病院だ。  
しかしあ、設備が整っています」と。

ヤバいよ?」

死亡サイン・・・つまり、瞳孔反射、心臓停止、自発呼吸の消失が  
確認されてから一時間たつても、今のところ百パーセント息を  
吹き返している。

因みに、こここの副主任の医者はネルだ。  
主任? またいつかいうよ。

「どうで、わざから何一ヤケてんの?」

「へ? 何でもねえよ。」

頭をなでてやる。

・・・顔が赤いな。風邪も引いてんのか?

「ま、もう少し寝とけ。」

「う、うん・・・。」

しつかし、笑えるわ。

フエイトside

くあ。

んー、体が痛い・・・。

ギシギシするなあ。  
ん・・・?

「何だよおーこれー」

奏谷? 何叫んでんだ?

「どうしたの？」

いてて。体がいてえ、動きづらい。

・ もうじた? ソノイア・・・・! ?

なんだその顔！？

112

つて言う事は俺も落書きされてんのか。

女子が猫で、男子が・・・よくわからん。

何かの動物なんだろうけどな。

はおう  
今回にあたましきたむ

リエが不思議そうに聞いている。

「一番ひどかった時は、みんな逆さにされててさ、頭に血が昇つ

「あれはヤバかつたよなあ・・・。」

ヘルヒザウガシナジアヒヌ。

ま、確かにヤバかつたなあれば……。

「おひ、全員起きたな?しかし、お前ら笑えるわ~。」

「「「「「ゆ・う・と?」「」「」「」「

「すまんすまん、ついな。」

「つい、でこんなことするな!!」

「もう怒るなよフヨイト、お前の好きな甘いもん買ってきたからさ。」

「な?あ、皆の分もな。」

「「おおーー!」

リエとレイが声を上げる。

ま、無理もない。

あの有名なゴ イバじやあなあ。  
え?

甘いものが好きなのに何でテンション低いんだよって?  
あいつの贈り物じやなけりや、素直に喜ぶさ・・・。  
ま、リエとレイが勝手に実験台になってくれそうだ。  
あいつらで確認してからもらうとしよう。

ひどい?

あいつは何してくるかホントにわからないんだ・・・。  
察してくれ・・・。

「ほい。」

「サンキユツ!-!-」

「ありがとー!-」

幽人が手渡ししていく。

さあて、何が入っていることやら。

「「甘ーい!」

「・・・マジ?・・・幽人、ちょうどいい。」

「ほい、ネル。」

「・・・甘い!? 今回はなにも入れてないの?」

「俺もそこまで酷じやねえよ・・・。」

・・・マジでなにも入れてないんか。

「幽人！俺も一つ。」

「ほらよ。」

見た目は問題ないな・・・。

「そこまで疑うなよ・・・。」

ま、あの三人が大丈夫だったしな・・・。  
ポイツとな。

うん、甘・・・！？

があああああああああつ！？

「かつ、かはつ！けはつ！」

「フヒイト！？」

「ソ、ソフィア！げほつがはつ、ミドウほつてひて！  
「御堂掘つてきて！？何それ！」

「ひがう！ミドウ！？」

「だから何！？」

「ははははははつ！？」

奏谷、この野郎・・・。

「へへへへへへ・・・マジでうなるー。」

キヨまで・・・！

「バー力。俺、手渡しで渡してたるーが！」

・・・言われてみりやそつだが、そんなことより！

「み、水・・・！」

「あ、水！？今すぐ持つてくるよ！」

ん？・・・つていうかさ！！

この状況でろれつが回らなかつたとはいえ、水は第一に持つてくるもんだろ！？

まつたく、この天然記念物が・・・。

そんな奴が俺の彼女なんだから、困つたもんだ。  
ま、そこが愛らしいんだがな。

幽人 side

いやー、面白かった。

こんな時の為に調合しといてよかつた。  
・・・フェイトもだいぶ落ち着いたな。

「いやー、面白かったよフェイト君？」

「お前いつか覚えてろよ・・・」

「そー言つなよ。ほら、ちゃんとした奴。」

「ホントだらうな・・・？」

「今度は大丈夫だつて。」

流石に俺もそこまではしねえよ・・・。

「つたぐ。・・・うん、甘い。」

「な？」

「しつかし、そんなに辛かつたのか？」

「おーおー秦谷君、俺調合だぜ？辛くないわけがないー！」

さて、もうだいぶ夜も深いな・・・。

あんだけ馬鹿騒ぎしたから、俺も眠い・・・。

「おーい、そろそろ寝よ。お前らも先治してないんだしさ。疲れ

ただろ？」

「主にお前のせいでな・・・」

「そう言つな、フハイテ、マジで悪かったから。・・・んじゃー、

お休み。」

「おーおーおーおー」

「おーおーお休みー」

息ぴつたりだな！？おーーー！

・・・ それでも眠い。  
ゆつべり寝るか・・・。

## 特訓後の日常。（後書き）

幽「マジで大変なんだからな、実は。」  
奏「イタズラしてただけだるーが。」

フ「そだつつーの！」

作「なにが大変なんだよ？」

幽「いやさ、看病は大体俺がやつてんだよね。」  
奏「それが？」

幽「だから、点滴入れ替えたりとか・・・まあ、色々してるわけよ。」

フ「? 大変か？」

幽「よく考えたら、大変なんだよ・・・。主任の助けがあつてもな。」

作「あー、分かる気がするわ。」

奏「読者は分かつてねえよ。」

フ「確かに。」

作「ん~。じゃあさ、お前らが一切動かずに一日を過ごす事を考え

たらしい」

奏「・・・は？」

作「困ることがいろいろあるだろ？」

フ「分からん。」

幽「・・・んじゃあ、一日中ベッドに縛り付けてやるよ。」

奏「いや、やめろよ！」

フ「え、ちょ、まじで！？」

作「あーあ・・・。次回に続きます。」

幽「特別企画……グダグダ会議が始まります……！」

幽「と言つわけで、ミス荒探し会議を始める……！」

菅「俺もいます！」

作「おい……なにする気だ……！」

奏「何も聞いてないんだが……！」

ネ「つていうかさ、菅谷つて誰？」

菅「……読者なり分かつてくれるはず。」

幽「良いから始めッゼ。」

作「だから何だ……！スッて、まさか俺のか！？」

幽「お前の以外に何があるんだ。」

菅「じゃあ、前にある十二枚の紙を見て、ミスを見つけた人は挙手  
！」

作「おいつ……！」

ネ「……」  
「……」

幽「そうだ。んじや、探してくれ。」

リ「ねえ~、なんか塗りつぶされてんだけど。」

レ「あたしのも。」

幽「ああ、そこは絶対にミスがないと分かってるとしかだから。  
消しといた。」

レ「へえ。」

ネ(ねえ、塗りつぶされている所つてもしかして・・・。)

幽(そう、ネーミングセンスに関する所だ。あの一人の紙だけ塗り  
つぶされてる)

リ「はーー。」

菅「はやー・・・。何ですか?」

リ「一話田と九話田ー。」

レ「一話田からミスー!?」

作「なんかミスつたけか・・・。」

幽「お前ならあいつの」

奏「ああ。」

フ「あいつのひな」

ネ「・・・なんかミスつてる？分かんないんだけど。」

奏「あ、俺もわかった。」

菅「で、理恵さんどうぞ。あと、サイン下さい。」

リ「後でね～。なんか、幽人が出て言つた理由を聞いている人が一人しかないように書いてある。つまり、帰つてくる期限を聞いている人も一人しかいないはずだけど・・・。九話目では、全員が期限の事を知つてはいるっぽく書いてある。そこがミスだと思うー。」

幽「よく気付いたな・・・。」

菅「読者の方々、分かりにくかつたら感想の方で。」

ソ「で？作者。言い訳は？」

作「・・・その理由を聞いていた人は実は九代目で、その、えーっと混乱が起きた時にそれを収めるために、九代目が皆に言つた・・・。」

リ「でもさあ～、『その男は何も言わなかつた』って書いてあるよ」。

作「・・・（汗。えーっと、一年経つた時に、九代目が『探しに行け』って言って、それで約束の期限がわかつて、一年探してやつと幽人が見つかった・・・。じゃ駄目ですか。」

ソ「ま、筋は通つてるね。」

幽「じゃあ、次。俺が言つぜ。」

菅「どうぞどうぞ。」

作「え？・・・ぱつと見、ミスつてねえぞ」

幽「作者のテストの結果が書かれてない。」

作「誰が書くか！恥ずかしくて書けんわ！！」

幽「冗談だつて、・・・ちつ。」

作「舌打ちー？」

幽「あ、俺が言えばいいか。」

作「流石に勘弁して下さい、幽人様！！」オーラ 土下座

幽「まあ、いいだろ」

フ「かなり氣になるんだが。」

ソ「うん。」

ネ「教えてよ。」

幽「後でな。次！ぱぱつと行くぞ。メンテくせえから

作「結局言つのかよ！？」

レ「はー。」

菅「何ですか？」

レ「第六話で、菅谷君が会員番号「001-14」になつてゐたが、会員  
が百万入つておかしくない？」

作「・・・確かに。」

幽「あいたー、これはアホだなあ。」

キ「言訳は？」

作「わざわざからちよこちよこ思つてたけど、言訳つて言わない  
で。せめて、訂正つて言つて・・・。」

奏「言訳は？」

作「・・・菅谷は、001-14ってところから分かるけど、114  
人目の会員だろ？要するに、まだ『光の恵』が売れ出した直後で、  
このぐらいでいいか、つていう感じで作られたから5桁までしかな  
い・・・。つてこいつ」と許して下せよ。」

幽「要するに、後の会員はひょんとしたものになつてゐる。」

作「そつとつ事で。」

菅「えーっと、俺からもいいか？」

奏「なんか菅谷が思いつせりなじんでる・・・。」

キ「ある意味凄いな。」

幽「ま、それが菅谷の特徴だ。んで？」

菅「えーっと、理恵さんと光さんのネー//」

作「奏谷ーーー！」

奏「しんくわうれつぱくせん真空烈波斬、弱ーーー！」

菅「つおおおおおおーーー！」

幽「大丈夫か！？いま田に見えない何かに」とんでもなことを見破られそうになつたな！（棒読み）」

奏「俺が吹き飛ばしてやらなかつたら大変なことになつてこたな！  
！（棒読み）」

菅「なにすんだよ・・・俺はただ

幽「喋らされやになつたんだよなー！（棒読み）」

菅「はー・・・」

奏「あつ、さう言えればネル、リヒとレイを連れて買いたいものがあつたんじやないか！？（棒読み）」

ネ「・・・そつ、そつだったーーつこづけてくれる？」

リ「へ？」

レ「……良じけど、今すぐ？」

ネ「う、うそー。」

レ「いいの？幽人。」

幽「いいよ。行つて来い」

リ「じゃー行つてきます。」

ソ「行つてらっしゃーい。」

キ「……あつぶねえ。」

菅「なんなんだよ……。」

作「奴らに自分のネーミングセンスが悪いことを気づかせてはいけない。」

幽「俺が治す予定だからな。」

フ「……言つても治らん氣がするがな。」

ソ「で？なに？」

菅「いや、ネーミングセンスが悪い悪いと言つてる割には、『フォルマカオ』とか『リヒト・ベフォルゲン』とか普通の奴もあるなあつて。」

作「ああ～、その話ね。まあ、説明不足だつたわな。」

幽「今言つた二つは、基本魔法であつて全てのタイムトラベラーが使えるんだ。だからネーミングが普通なんだよ。」

菅「なーる。」

ソ「ねえ、その説明の為だけに三人がどつか行つちゃつたんだけど・・・。」

奏「仕方がない犠牲だつたのさ・・・。」

幽「さて、作者、最後にしたい言い訳は?」

作「(最後?)・・・・言ひ訳つづり、説明したいんだが。」

キ「何の?」

作「フォームの・・・。」

奏「・・・確かにされてねえな。」

菅「ふおーむつて何だ?」

幽「よし。分かつてない奏谷君と作者救済の為に説明してあげよ。」

「

キ「フォームには基本とオリジナルがあつて、基本が五種類、オリジナルは各タイムトラベラーが持つていて、自分で作ったフォーム

の「ことだ。」

フ「つっても、オリジナルも流用が起きていて、同じものを使っている奴も多いがな。」

幽「あと、キヨ、基本は五種類じゃない、六種類だ。俺のマイナスフォームが入ってねえぞ。」

奏「あれって、基本だつたのかよ・・・。あそこまで力を制限するフォームはお前しか使わんから、お前のオリジナルなのかと・・・。」

菅「結局フォームって何なんだよ！根本的な説明になつてねえぞ！」

作「フォームは、力を制限するもので、周りに人がいる時や建物がある時などに自分の力で被害が及ばないようにするためにある。」

ソ「・・・それってさ、ランクで制限されてるんじやなかつたの？」

キ「・・・ランクでも力の制限つてあつたのかよー？」

フ「知らなかつたのか？とはいえ、ランクによる力の制限はうまでだ。お前には関係ねえよ。」

菅「・・・分かつたような、分からなかつたような。」

幽「まあ、分からなくても明日死ぬわけじゃねえし。良いだろ。」

菅「・・・まあな。」

幽「やで・・・。」

作「ん?どうした?」

幽「このグダグダになつた会議の責任・・・取つてもりあつか?」

作「へ?ちょっと、#」

幽「『ロジヘ・アンウホッタ』ーー。」

フ「・・・

キ「・・・

ソ「・・・

菅「・・・

奏「文字通り、塵も残らなかつたな・・・」

ソ「今思つたけどさ、あたし達作者の尻拭いさせられただけ?」

幽「・・・ちょっとあいつの世界に行つてくる。たぶん今の一撃で、もとの世界に戻つてゐるはず・・・。」

奏「・・・『愁傷さま、だな。』

フ「うう、飯食ひに行こーぜ。」

ソ「あの三人も迎えにいかないとね。」

キ「菅谷も来るか？」

菅「いいのか？」

キ「お前が良いならな。」

菅「喜んでいきます！-！」

奏「おっしゃ、やっしゃー行きますかー！」

キ「それじゃ、皆様、今日の会議のよひに、矛盾点、説明不足、その他もうもひがいります。」

フ「いつでも感想は受け付けているので、ガンガンビューベ。誤字脱字とか。」

ソ「それじゃー皆様。また次回！-！」

幽「特別企画！—グダグダ会議が始まります！—！」（後書き）

幽「ち・く・しゅ？」

作「うおつー？何で！？」

幽「くらえ！第八話ぐらいで使った、渾身の！」

作「待て！はなせば

幽「右アッパー・カットおー！」

作「げふうつ！？」

幽「・・・よし、それじゃ、皆様。バカ作者に代わりまして、非常に投稿が遅れたこと、今までにない位のグダグダ、駄文だったことをお許しください。それでは、また次回！！」

## 合宿の警護なんて……

幽人 side

「ああ～、……………ヒマだな～。」

……みんな、思い思ひのこじ終わってダラけてるじ。  
俺もルービックキューブ5×5×5を30周ぐらこしちゃったじ。  
……ヒマだ。つーか秦谷どこ行つた。

「依頼持つてきただぞ～！」

「…………ウソじやねえだらうな？ 秦谷？」

ずっと前に、似たよひな空氣を良くじよつとして秦谷が依頼持つて  
きたとかウソ言つた事がある。

その後、皆に半殺しされたがな。

あの日の事を覚えていないわけじやあ、あるまい。

……といひか、ウソをついて暇な状況を開しよつとする意味がわ  
からんのだが。

「ウソじやねえよ。ほれ。」

端末を投げつけてくる。…………もつちよつと一寧に扱えよ。

「…………ん～と？ 生徒の警護？」

「これつてか、私たちがやるよひなレベル？」

ソフィアがもつともなことを言ひ。

確かに、これは俺たちがやるよひなレベルの高さじやない……が、

「何か理由でもあるのか？奏谷。」

「幽人、お前に名指しで依頼が来たらしい。」

「はあ？」

「どこの学校だ？そんなことしゃがつたの？」

「フュイト、お前の疑問の解決先はこちりだ。」

キヨがせつきの端末を自分のパソコンに接続して、具体的な情報を引き出す。

端末には、かなり強いセキュリティが掛けられている。

だから、キヨみたいに一々パソコンにつないでセキュリティを破壊しないといけない。

下のランクの奴らは、よく解除できなくて上の連中に助けを求める。

九代目のお遊びなんだが……、いい加減にしてほしい。

正直面倒くさいんだ。

「清明学園……？」

「……なんだと？」

「もう一回書つてくれ。フュイト。」

「清明学園。」

「没の方向でいいか？」

「なんで！？久しぶりにみんなに会えるの！」……。

「そうだよ~~~~~。」

「ウソ泣きはやめる。レイ、リヒ。」

「めんどくせぇーもん。あいつら元気の。

「大体俺らじゃなくていいだろ。」

「……ネル。やれ。」

「あいよ。奏谷。」

「痛つ……」

首筋に激しい痛みが走る。  
反射的に刺さったものを手に取り、見ると  
注射器だった。

「なに……しゃがん……だ……。」

俺は意識を手放した……。

ソフィア side

どうも。ソフィアです。

酔い止め飲んだけばよかつた……。

今、バス車内です。

あの依頼は合宿の生徒の警護だったんだけど……

「大丈夫か?」

「オールオッケーですよ。グッジョブですよ。フュイト君

「全然大丈夫じゃなさそうだな……」

ちよつ、限界……

「フュイト……。」

「はいはい。」

膝枕……。でも……もう無理です……

あ、俺か？

幽人早く起きねえかなあ。

あの時、ネルが打つたものは相当に強力なものだつたらしく（ネル曰く、最強のものらしい。）

五日たつたんだが、未だに目が覚めない。

加減しろよ……。

今幽人は……他の生徒たちからしたら、相当つらやましいポジションにいる。

要するに、リエとレイに挟まれてる……二人用の席で。

相当、狭そうだ。

好かれてるねえ、幽人は。

「早く着かねえかなあ。」

「後、一時間ぐらい？」

マジですか……ネルさん。

「ふあ？」

ん？幽人が目覚めたか……。

幽人 side

……「」だ。

「お田覚め？」

「ようやくだね～」

「レイ……リエ……？」

て言うか、ここバスの中？

そうか……あの時眠らされて、無理やり任務に……。

「やつと田が覚めたか？幽人」

「菅谷！？」

「よつす、久しづぶり。」

よりもよつて、高一の警護かよ……

「何だよ、うれしくなさそうだな？」

「面倒なのは嫌いなんだ。」

「面倒つて……ひどくね？」

菅谷が何か言つてるが、無視する。

んなことより、さつきから嫌な感じがするんだが……。

窓の外に目をやる。

が、レイがどアップになる。

「ちょっと、レイ、だけ。外が見えん。」

「何か見えるの？」

窓の外をよく見る。

「あれは……！？」

「マズイつ！」

「『リヒト・ベフォルゲン』……」

ほぼ全力のリヒト・ベフォルゲンを放ち、バスを完全に覆つ。デカイ爆発音とともに車内で騒ぎが起ころ。

何故だ……！何でもないこのバスを何故狙つ……！

「何だ！どうした幽人！！」

「奏谷、オプキュリアスだ！！」

「はあ！？何で！？」

「知るか！キヨ、バスは全部で何台だ！？」

「五台！」「こは」「号車だ！」

「フェイトとソフィアは五号車、レイ、リエは四号車、キヨ、奏谷は三号車、ネルはこのバスの屋根に上がって、砲撃の阻止及び砲台の破壊、俺は一号車……！」

いきなり天井が斬られ、敵が入ってくる。  
ちつ！もつかよ！

「このバスは」

「「「邪魔なんだよ！」「」」

俺、奏谷、フェイトの蹴りが炸裂する。

「がつは……？」

なんか言おうとしたつぽいが、消えた。  
他のバスにも来てんのか？  
……急がねえとな

「ほら、お前ら！行くぞ！ぼさつとすんな！」

俺は開いた穴から屋根に出て、一号車に向かった。

十六時 合宿 一 田中の午前の様子……？（前書き）

作「久々に帰つてきました！」

幽「何してたんだお前？前回あんな駄作を残してからほつたらかしにしやがつて。」

作「まあ、色々あつたんだよ。風邪引いたりとかな。」

奏「その程度で……？」

作「きつかつたんだよ！あれば！」

幽「はいはい、分かつた分かつた。監様、どうでもいい作品が再び投下されています。」注意ください。」

作「ひどくね……げほつげほつ。」

奏「直つてないんかい！？」

幽「ま、こんな作者はほつといて、本編始まります。」

## 十六時 合宿 一 田口の午前の様子……？

フェイント shade

「あり？」

俺も屋根の上に上がつてみると、まだ幽人がいた。

「どうした？ 幽人。」

「いや、砲撃してきたやつがいないなあつて思つてな」

「……ほかのバスには異常がないな。」

「それもだ。あいつら何がしたかつたのかねえ？」

確かに。

俺たちのバスに来たやつは何だつたんだ？  
制圧するなら、俺たちタイムトラベラーがいないバスを狙つたほうが良かつただろう。

「おい、早く行けよ！」

下からキヨの声が聞こえる。

「作戦中止っぽいぞ、キヨ。……だよな、幽人」

「ま、敵さんがないんじや、作戦もくそもねえだろ。」

「というわけで、銃をしまおうかネルさん。」

すでにライフルを構え、銃口をこちらに向いているネルがあつかない。

てか、何で俺に向けてんの？ 田口の恨みは秦谷に向ってくれ。

「ええ――久々にぶつ放せるかと……。……………よし、幽人

「んあ？」

「逝つてこい！」

呼ばれて、顔を出した幽人に容赦ない一撃を放つ。

一五〇

死ぬたゞかああああああああ！！

「ふざけんな！！」

一一〇三一

日常茶飯事とはいって、場所は考えてほしい。  
見ると、残りのやつらはすでに席に戻つて、  
俺もあちらに戻るとなりますかね。

二人を尻目に、おれはいそいそと席に戻った  
……つーか、ひとつ疑問なんだが、この生徒はどんな神経回路してんだ?

幽人 s i d e

どうせへつねました！合宿所！

いやー、縁が豊かです！！

「いやー、テンションあがりますねえ。じつですが、秦谷さん。」「少しば落ち着けよ……」

「ノリがわりいなあ。んで? キヨ、次の予定は……ってどこ行つた?

「ナヨな、何いってんだ。」

奏谷が指差した先に、女子に囲まれどうしたらいか困つているキヨがいた。

「独り身でかっこいい男つてのは、大変だねえ。」

「お前が言うことか? ほら、お前の後ろにも……」

「おいおい、ギヤグはよそうぜ。えーっと、会議室1か? 行こうぜ……つて、皆捕まつてんのか。」

どうしてこう、俺らのチームの連中は異性に纏わりつかれるのかねえ。

いつの間にか奏谷もあつちに行つちまつし。

しゃーねえ、俺一人で行きますか?

俺は、一人鼻歌歌いながら会議室1があるであらう方向を目指して歩いていった。

ソフィア *side*

「や、やつと着いた……。」

みづやく発見した会議室。

集合時間三十分ぐらい前に、行動開始したのに、着いたのは集合時間から十五分遅れ……。

「おつせーぞ、常時遅刻魔。」

幽人の口から、刃物のように鋭い一言が飛び出す。

「ひつじー! 遅刻魔からワソランクアップしてんし……。」

「どうやつたら治るんだ? それ。」

「あのね、キヨ。いつも言つてるけどさ、私は遅刻したくてしてる

んじやなくて、道に迷っちゃうの……」

「余計質が悪い。」

「ぐむうう。ちょっとひどいと思つよ……幽人……」

「ポケーっとしてそうで、中身もしつかりしているリエを少しば見習え。」

突然魔力の放流がほとばしり、幽人の姿が消えた。生徒たちも唖然としている。

見ると、リエの手から、魔力の残光が見える。

「それ禁句だから、今後は気をつけてね、幽人。」

笑顔が怖いよ、リエ……

「げほつ、は、はい……。」

「それじゃ、タイムトラベラーからの注意事項です！」

恐怖に包まれた会議室で、リエの口から注意事項が読み上げられるけど、

誰も聞こえないんじやないかな……

でも、何で禁句なの？

奏谷 side

さて、気を取り直していきますか。

生徒たちへの注意も終わり、昼食の時間になつていてる。

俺たちも一箇所に集まつて、昼食中だ。

「で？これからどうすんだよ、幽人。」

俺がコロッケをほおばりながら聞く

「今後の予定にもよるんだが……キリ。」

「えーっと、散歩だな。」

「散歩お？」

ネルが怪訝な声を上げる。

確かになんか「ひ、合宿でわざわざやめよつな」ととは思えない。

「正式名称は散策。おれが勝手に読み替えただけだ。」

「何するの～？」

一足早く食べ終えたリエによるぼけた質問。

ここには、やつきの出来事から、

『あのボケ口調はボケキャラを作りついでやってこい』

といつ疑惑がかけられている。

みんな、口に出さないがな。

「いや、だから、散歩みたいなものだつて。」

「もひいい、エンドレスに続きそうな『氣』がするからそこまでな。」

幽人が打ち切る。

……なんでここには皆が食べている前で銃の整備をするんだ？

「何で銃の整備してんの？」

レイが不思議そうな顔で聞く。

俺のセリフを奪うなよ……

「いや、出来るときにしないこと暇がなさそうだから。」「でも、行儀悪こよ？」

「良じんだよ…… つと、よしーできたー。」

「一丁の銃が組みあがる。

その一丁の拳銃を虚空に消し、立ち上がった。

「おしーそろそろ行くかー。」

幽人が出口に向かうと、ほかのメンバーもぞんぞん立ち上がつてい  
つた……つて、

「ちよつ、俺まだ食べ終わってない……」

悲痛な声を上げてみたが、無視された。

周りを見ると、掃除をしているおばさんたちしかいない。

「はあ……。」

急いで胃の中に食べ物を押し込んだ俺は、急いであいつらを追いか  
けることにした。

十六時 合宿 一 日の午前の様子……？（後書き）

作「えーといきなりなんですけど、しばらく全然更新できなくなります」

幽「おい、こんだけ開けといてか？」

作「しょうがねえだろ。ちなみに期間は一年ぐらいでですか？」

レ「これはまた、長いなー。」

幽「理由は？」

作「えーと、コーナーページとかから察してぐだせー。」

幽「出来るかあーーー！」

レ「しょーがないよ、幽人。これがこの作品の作者だよ。」

幽「ちつ。」

作「そうそう。」

幽「レイ、俺が教えたあの技でやつちやつて。」

作「おい、それって今後に出す予定のあの技じゃ……」

レ「オッケー。いつくよー！『豪火絢爛』！…」

作「ぎいやあああーーーあつー！熱いつて！ちよつ、あつーーー！」

幽「というわけで、しばらく更新が滞るそうです。……そんな事言つておきながら、すぐに次のやつ出しちゃうだけだな。」

レ「今まで遅かったんだけどね。……読んでくだけさつてこる少ない方々、申し訳ありません！」

幽「それじゃー、また次の回でー！」

レ「またねーーー！」

## 散策つーー（前書き）

お久しぶりです……。

覚えている人は……いませんよね。

まあ、いいや。

今回時間がかなりないので、前書きはこの程度で……。

では、どうぞ。

# 散策つ ！！

幽人 s i d e

奏谷から、怒声が飛んでくる。

時は五月、空は快晴、道は緩やかな斜面。確かに、散策にはぴったりの一田だつた。だけどな……。

「黙れ！」  
「だつ」

今度はフェイトからの怒声。  
まだ三十六回目じゃないか。  
だるいって言つたのは。

「お前ら心狭いなあ。」

お前に言われたらおしまいだぜ。

「奏谷よ、そんな事言つていいのか？俺、一応リーダーなんだけど。

「自然の中を歩くところを楽しめんやつの気が知れん。」

## 俺の反論は一蹴された。

しかし、長い……。

あと、一光年ぐらいは

「一光年もないよ、幽人」

「レイ……お前は読心術でも持つてんのか？」

「持つてないよ。予想しただけ。」

なんだこいつは……。

アイドル + Time Traveler + 人の心を予想…… つてか、これって読心術だよな?

こんだけ、  
てんこ盛りつ  
て……

60

というわけで、山頂です。

「いやー、気持ちよかつた。」

何が?」

ネルが横から聞いてくる。

右腰に銃がぶら下がっているのがかなり気になる。

「とりあえず、その銃消しとこうか。」

「い」

右手で銃を引つ張り出し、空高く上げると虚空へと消え去つた。

「んで？何が気持ちよかつたの？」

「そりゃー、あのマイナスイオンたっぷりの空間を歩けばそりなる

だろ？」

「……わかんない。」

「お前も幽人と同類か……。」

思いつきりため息をつく。

なぜこの良さがわからんのだ。

「幽人と同類つてひどくない！？」

「あいつもお前も自然のよさが全くわかつてない！！」

「それだけで同類つて……」

「じゃあ、今から自然のよさについてみつちり教えてやるよ。」

「あ、いや、あの」

「いいな、まず自然の中に入ることでいろんなことを感じることができる。

たとえば、森の中を風が吹いていつたとしよう。

そうすると、俺たち人間は爽快感というものを得ることができる！

その爽快感は古来より人間が受け継いできた感性だ。

遺伝子レベルで刻み込まれたそれが呼び覚まされるとき、人間は『ああ、あれ、生きてる……』と感じることが出来るんだ。

その他にも、日本人は信号の緑を青色、と呼ぶだろ？

そこにはだなあ

「

ネル side

や、やつと終わった……

みつちり三十分。

まだ続きをうだつたから

「うん…とつてもよく分かつた…！」

つて言つて、逃げちゃつたよ……

あ———、疲れた。

癒されるどころか、疲労感たつぱりじゃん。  
たま——にああいつた事があるのが、少し残念なんだよねー。  
ま、もう慣れたけどね。

……ん?

「どうしたの、幽人。」

幽人がボ——と空を見上げている。  
今も声をかけたけど反応がない。

「お——。」

反応なし。  
う——ん。

「レーイー! ちよつといつから来てー!」

「うん? なーに?..」

男子に囮まれていたレイを救出するつらに、一緒に幽人を覚醒状態にしてもらひ。

「……ほつといたらダメなの?」

「ほつといたら、永遠にあそこには立ち尽くすよ?..」

「つつそだ~。」

「いや、嘘じやないよ?..

だつて、ひどいときは、冬の雪が降つてゐる中、一週間は立つて  
たからね。」

「よし、起こしますか。」

レイもこの状況が分かつてくれたところで……

「どうやって起こすかよね。」

「へ？ ないの？」

「その時は、全員で攻撃して覚醒させたんだけど……」

「けど？」

「半殺しにされてね……」

「うわーす……」

そう、どうやって起こすかが問題なんだよね。  
下手な起こし方じゃ起きないし。  
かといって、半殺しもいやだ。  
うー、どうしたもんかねえ。

「じゃあ、こうすればいいんだよー。」

「へ？」

レイが幽人に近づいていく。

何する気……？

そう思つてたら、耳元に口を近づけ、

「ふ~」

「ぎゃひ~!~?」

……起きたー? ?

耳に息吹きかけただけで！？

つーか、幽人、変な声あげすぎーー！

レイもそんな事しちゃヤバイでしょーー！

幽人の命が危なくなるよー? ?

主に男子生徒によつて！！

ま、まあ。

起きたからよしとするか、うん。

「起きた？幽人？」

「ネル？……ああ、またボーッとしてたのか。」

「何でボーッとしてたの？」

レイが聞くけど、この子、自分がやつた重大性に……さすがに気づいてるか。

だつて、顔赤いもん。

全く、恥ずかしいならやんなきや良いのに。

「いや、まあ、色々あつてだな。」

そういう前置きをおいてから、幽人が話し始めた。

## 山頂にて、秦谷の「だわり」（前書き）

お久しぶりです。

まあ、ほとんど誰も覚えていないでしょうが、くじけず頑張ります。  
それにも、読み返すとひどい文でした。

わざわざ、お気に入りに入れてくださった方々の優しさが身にします。

近々、全ての文を書き直したりするかもしれません。

その時は、色々と「容赦ください」。（大筋は変わらない）と思います。

）  
えー、それでは本文をどうぞ。

## 山頂にて、秦谷のこだわり

side 幽人

俺は今、レイとネルに、バスの中で気配を感じて肩透かしを食らつたあの時の事を話している。

「なるほどね、あれはあんたに対する忠告だった、と言いたいの？」  
「ま、そういうことだったな。」

ネルがあごに手を当て、考え込むしぐさを見せる。実際、あのときの気配には奇妙なところがあった。嫌な気配が俺しか感じられなかつた事だ。

漠然としていたが、あの気配はあの場にいたタイムトラベラーならば、感じられてしかるべきものだつた。  
だが、現実問題として、俺一人しか感じていない。  
考えられる理由としては、俺個人に向かつて放つた殺氣、もしくはそれに準じたものだからだろう。  
それにしてもなぜ……。  
と、ネルと二人して悩んでいると、

「ま、考へてもしょーがないじゃん。  
来たら來たで、迎え撃ちにすりや良いじゃん！」

と、緊張感のかけらもないもう一人の傍聴者の声がしてきた。

「何かがあつてからじや遅いんだよ！」

「一応、ここに警備を任されてんだぞ？」

「でも、敵の目的がわからぬいうちから悩んでたつてさあ。」

「それはそうだけど………-?」

瞬間、俺の感覚がクリアに、あるひとつのものだけを捕らえるようになつた。

人も何もない真っ白な空間に、ぼつんと一人で立つているような錯覚を起こす。

その白い空間を、灰色のドームがある一定の範囲を包み込む。久々に陥つた状態に楽しさを感じつつも、これが意味する物を理解し、行動を起こす。

「ソフィア！！

南東方向！！」

「へ！？」

「、『公平に隔てたる差別の壁』……」

ソフィアの魔力が開放され、きつちり南東に魔力による壁ができる。あれだけで理解してくれたのは助かつたが、俺の白い空間にできたドームは少し灰色が減衰しただけで、完全に白くなつていない。いきなりの振りで、魔法に十分な魔力がこめられていないのが、よくわかる。

「『リヒト・ベフォルゲン』！」

追加で俺の魔法を飛ばす。

結果、灰色のドームはきれいさっぱりなくなり

、轟音、とともに着弾した感覚がもろで腕に伝わつてくる。

辺りがかなり震えるが、周りに被害はまったくない。

計算どおりに行つた事に、内心でにやけながら、攻撃が飛んできた方角を睨む。

ちなみに、たつきから見えていたものは、攻撃範囲およびその強さ

の予測だ。

範囲は、ドーム状だつたり点だつたりする。

強さはかなり感覚的なものを要求されるが、黒の濃さで表示される。

……俺としては、青とか赤とかをもうちょっと別な形で入れたいのだが。

まあ、文句は言つまい。

これでも、生まれたときから付き合つてゐる能力だ。たまにしか発動しないのも難点だが。

「……見えたつ！」

ネルが鋭く叫び、何もない空中からハンドガンを取り出し、大した狙いもつけないまま、空中を飛ぶ敵に向かつてトリガーを絞つた。きつかり20発を乱射し、内、8発もの銃弾がぎりぎり見えている敵の体に吸い込まれる。

乱射している割には多かつたが、呆氣なく全弾が回避される。

「攻撃すんな！

どうせこっちにくるさ。」

全員を落ち着かせるために、適当な事を言つてみる。

正直、ロングレンジからの砲撃を繰り返すと思つていたが。

予想を裏切り、こちらへと飛翔してきた。

そのまま、地面に降り立つ。

顔には、穏やかな笑みが浮かんでおり、一見すると良い人であるかのような印象を受けた

右足を引き、右手を胸に当て、深々と一礼する。

そのままの体勢で、

「オプキュリアス、ゼウス直属ヒュペリオン第一部隊『太陽神』リーダー、ヘリオス。  
以後、お見知りおきを。」

と、懇懃に挨拶をする。

「お前の名前なんて誰も聞いてねえ。

何の用だ。

事と場合によつては、タイムトラベラー10代目の俺が相手して

やるよ。」

「我々の目的は、今も昔も変わつておつまません。」

オプキュリアスの目的、それは至極単純。  
世界征服だ。

子供の夢かよ、と言いたくなるが、ここつらは本気でやつてくる。  
まあ、どうぞどうぞ、といつ訳にも行かないで戦つていいのだが  
……。

あいつが何をしたいのかが、俺にはまだぱりわからん。

「あつ、そこですか。

じゃあ……」

後の言葉は続けられなかつた。

なぜなら、

「」の世界から退場した。

奏谷に台詞を奪われたからだ。

「おー、奏谷……そりゃないぜ?」

「悪い、ケビン、こつは俺に任せてくれねえかな？幽人。」

その言葉を否定する理由もなかつたので、やれやれ、と肩をすくめ、肯定の意を伝える。

奏谷は一つ頷くと、ヘリオスをまっすぐに見た。

「あなたが、相手をしてくださいなんですか？」

大丈夫でしょうか？

死なないでくださいね。」

「お前には、二つの罪がある。」

ヘリオスの言葉を完全に無視した奏谷は、さらに言葉を続ける。

「一いつ皿は、けいの生徒を危険にさらした事。」

奏谷の右手の人差し指が伸びる。

「一いつ皿は……。」

中指が伸び、

「けいの自然を破壊しようとした事だ……。」

口から言葉を放つた時点で、全員の動きが止まつた。

そういうえばこういう奴だったと思いつつ、ヘリオスのほうを見やる。同じく呆然としていたが、すぐに顔を元のように戻した。

「それは矛盾しますね。」

「何がだ。」

「今から、私とあなたは戦うんですよ？」

その過程でもうとくの自然が破壊されるでしょう。」

最もな反論で、不覚にも頷いてしまった。

しかし奏谷は、その反論には全くひるまなかつた。

「お前が、最初の攻撃で出たであろう被害以下には抑えられるね。」

「……もう良いです。」

反論する気がなくなりましたよ。

さつさとやりましょう。」

「来い。」

奏谷が大剣を取り出し、だらりと構える。

俺は、大検によつて、土が少しえぐれていのを見て、最初の被害が出たな、と場違いなことを思つた。

ヘリオスは両手に魔力を込め、同じくだらり構えている。数拍の後、両者が激突した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4069q/>

---

TimeTraveler

2011年11月23日12時58分発行